

スタイルから見る日本語文法

中川正弘

0. はじめに

日本語を勉強している者たちの書いた日本語作文の添削が単純な誤字、脱字の書き直しにとどまることはまずない。日本語にはない語順や構文も出てくれば、一読しただけではどうしてそこに使われているのか分からない語彙もある。彼らが会話で使う日本語も同じだ。

しかし、日本人の使う日本語ではお目にかからないこのような「異常」でいっぱいだとしても、彼らの作文や会話を成立させている思考がまったく理解できないことはあまりなく、おおよそは理解できるものである。

外国人の使う日本語の「誤用」は日本語文法を考える一つの視点として定着しており、これが極めて有効なものであることには議論の余地がないのだが、何が正しいかは何が間違いであるかを見れば分るとだけ考えていけば、誤用研究はどうしても簡単に正誤の判定が下せるものに偏ってしまう。明らかに間違いと分かる日本語と正しい日本語をただ比べるだけでは日本語の全体を見たことにはならない。日本語学習者の書いた日本語作文を読んで何か異常やズレを感じるのは、そのように白黒がはっきりしたところだけではなく、それよりはるかに多くの箇所でも白とも黒ともつかない灰色を感じるからである。

灰色は黒ではないと考えれば白、白ではないと考えれば黒と見える。客観的に行えるかのように思える正誤の判定も人間の「主観」と無縁ではいられない。言葉の問題には主観を通してでなければ考えられないものが多くあるはずだ。

1. 不一致の文法と正誤の判定

誤用とされる日本語の事例をいくつか見てみよう。

- 1) 「朝御飯はもう食べましたか。」
「はい、食べました。」 (○) 「まだ食べませんでした。」 (×)
「はい、食べています。」 (○) 「まだ食べていません。」 (○)

このような例では過去時制的な完了で発せられた質問に対して「まだ食べませんでした」と時制を一致させると間違いで、未完了で現在完了的に「まだ、食べていません。」と答えるのが正しい。これは日本語が形式上の一致ではなく、内容における対応を重視するからである。

ただし、このような形式において非対応になる例の周辺も見ておいたほうがいだろう。

- 1)' 「昨日は朝御飯を食べましたか。」
「食べませんでした。」(○)
「食べていません。」(○)

この例を考慮に入れると、1) は動詞の文法形式が一致しないというよりも「もう／まだ」という副詞によって明確になる現在時における完了／未完了の問題であることが分かる。

また、1)'の例で「食べませんでした」が標準的ではあるが、「食べていません」も使えなくはない。二つの使い分けがはっきりする場合もあるが、どちらで答えても違いがまったく問題とならないことも多いようだ。

そう考えると、1)は質問の時制に答えの時制を単純に合わせるはいけない例でもあるが、質問自体が答え方と同じ形を取って「朝御飯はもう食べていますか」となってもよかったところが、別の表現が同義的に選ばれた例でもある。

「朝御飯はもう食べていますか」は「朝御飯はもう食べましたか」ほどは出現しないかもしれないが、「まだ食べていません」はこちらの質問のスタイルに対応しているのである。従って、質問の形式がこちらであれば、対応／非対応の見え方は違って見える。

- 1)'' 「朝御飯はもう食べていますか。」
「はい、食べました。」(○) 「まだ食べませんでした。」(×)
「はい、食べています。」(○) 「まだ食べていません。」(○)

質問に対して形式的に一致した答え方が間違いで、形式を合わせないのが正しいと言うと、正誤の問題は込み入ったものに見える。だが、これを、等価値と見なされる表現の群が成立しており、その中でスタイルが選ばれることによって起こる問題と考えればどうだろうか。

次の例を見てみよう。

- 2) 「これを買うつもりですか。」
「買うつもりではありません。」(△)
「買うつもりはありません。」(○)

この例で形式において質問に対応している「買うつもりではありません」は間違いとまでは言いにくく、誤用研究の対象にはならない。しかし、外国人がこのように形式的に正しく対応した答え方をするのを聞くと、違和感を覚えるのではないだろうか。これは「買

うつもりはありません」の方と対応しているもう一つの質問の仕方、「これを買うつもりがありますか」がやはり正しい表現ではあっても使いにくく感じるのとよく似ている¹⁾。

- 3) 「あの人を知っていますか。」
「知っていません。」(×)
「知りません。」(○)

- 3)' 「あの人を知りませんか。」
「知ります。」(×)
「知っています。」(○)

3)'は3)を裏返したものだが、このような不一致があるせいで、「知りません」という答え方から逆に「あの人を知りますか」という質問を作る者が少なくない。日本人が使わないものなのだから間違いだと言うしかないが、それならなぜ「知っていません」、「知りません」がいけないのか、はっきりさせなければならない。

「知る」という動詞が知らない状態から知っている状態への移行を意味するのだから、「知ります」と「知っています」とではアスペクトが違う、つまり、前者は状態の移行、後者は移行した後の状態ということで違いははっきりと説明できる。しかし、そうなると、3)の「知りません」がどうして可能なのか、また3)'の「あの人を知りませんか」がどうして可能なのかは説明できない。

一方、3)の「知っていません」はどうだろうか。「知っていますか」に対して「知っていません」は正しく対応しており、文法、語義から見て間違いとは言えない。3)の正誤判定は本来逆ではないかと思えてくる。

この問題を考えるには別の視点をとるしかない。3)と3)'は裏返しだと言ったが、この二通りの質問、「あの人を知っていますか。」と「あの人を知りませんか。」は肯定と否定で違ってはいても、日本人にはほぼ同義で、ほんの少しスタイルが違うだけのただのヴァリエーションのように感じられてはいないだろうか。語形を分析的に見れば、明らかにアスペクトが違うはずなのだが、3)'は修辭的に否定が使われ、いくらか語調が柔らかいとしか感じない。外国語への翻訳を考えても訳し分けるほどの差異はない。

こうした日本語の形式上の非対応、不一致は日本語の文法が英語などと比べて、不完全であるかのような印象を与えもするが、それは文法というものがそもそも言葉の規則性のみ注目するからであろう。文法は言葉を見る唯一の視点ではない。言葉は「文字どおり」の意味だけではなく、本来の語義を大きく離れ、時には全く正反対の意味を持つことがある。また、意味の全く異なる二つの言葉の間に語義の違いを越えて等価性を打ち立てるような修辭法もある。古代からそのような意味作用の研究が文法のすぐ隣で行われていたの

は、言葉の全体像を捉えるためには規則性だけではなく、規則からの逸脱まで見なければならぬと考えられたからであろう。

西洋言語の文法と比べ日本語の文法が不完全に見えるとき、それは標準的な使用からの逸脱なども含め、表現に関わるさまざまな現象を扱う修辞学の視点から見直さねばならない場合のように思える。

2. 同義性とスタイル

文法という規範的な視点に立ち、正誤を判定しようとしても、すっきり説明できない例について考えたが、その際、文法形式が異なっても成立する等価性に注目した。これについてさらに考えてみる。

- 4) 「あなた、辞書は持っていますか。」
「あなた、辞書はありますか。」
「はい、持っています。」(○) 「いいえ、持っていません。」(○)
「はい、あります。」(○) 「いいえ、ありません。」(○)

「持っている」と「ある」では語義自体も、組み合わせる助詞も違っている。しかし、このような質問に対して日本人は形式を合わせて答えなければいけないとは思わないようで、「ありますか」と聞いて、「持っていません」と答えられてもおかしいとは感じない。それはこの二通りの言い方が取り替え可能である、つまり等価と見なされているということだろう。二つの動詞は原義を比べれば、だいぶ意味が違うはずなのだが、実際の受け答えでその違いが問題とならないなら、これらは同義表現で、答える者のスタイルが違うだけと考えることができる。

- 5) 「郵便局は近いですか。」
「郵便局は近くですか。」
「はい、近いです。」(○) 「近くありません。」(○)
「はい、近くです。」(○) 「近くではありません。」(△)

この例でも、「近いです」と「近くです」は文法使いの違う同義表現となっている。4)と同様に答え方が質問の文法形式に対応していなくても気にならない。

上級レベルになっていても、外国人は「近くです」をあまり使わず、もっぱら「近いです」を使うが、それは「近くです」が文法から見れば一ひねりされているため、教室で積極的に教えられていないからであろう。一方、日本人は「すぐ」とか「この」と組み合わせることで簡単に使いやすいからであろう、「近くです」が使われる頻度はかなり高いように思う。

ただし、否定では逆に「近くありません」を選ぶようだ。「です」と「ではありません」は単に肯定と否定で対等に出現していいはずだが、そうなりにくい例があるのは、断定という行為が肯定に偏りやすいからかもしれない。

- 6) 「レポートのテーマはもう決まりましたか。」
「レポートのテーマはもう決めましたか。」
「もう決まりました。」 (○) 「もう決めました。」 (○)
「まだ決まりませんでした。」 (×) 「まだ決めませんでした。」 (×)
「まだ決まっています。」 (○) 「まだ決めていません。」 (○)
「まだ決まりません。」 (○) 「まだ決めません。」 (△)

「決まる」と「決める」では自動詞と他動詞ということで文の論理構造は違っているはずだが、表面的にはこの例のようにごくわずかな語形の違いしか出ないことが多い。答え方が質問の文法形式に対応していなくても、論理構造が違うとか、逸脱しているとは感じない。せいぜい質問に答える者の心理傾向のごくわずかな違いがあると感じるだけだ。

本来、決定という行為について主導的かそうでないかが表されるはずだが、実際にはあまり区別されなくなる。決定について主導的だった者が言葉遣いは穏やかに聞こえるよう「決まりました」を使っていたり、決定を人任せにしていた者が「決めました」を使うことも現実には多いからである。この答え方だけでは語義の違いが現実を反映しているかどうかは分からない。二つはどちらの意味なのかはっきりしない混沌とした同義群を作りうる。だから、答え方がずれていても抵抗がないのだろう。

また、ここでは「決まっています」だけではなく、「決まりません」も可能だ。1)のように形式が非対応でも答え方が一つしかない場合は、そうでなければならないと、規則、文法として扱うことができるだろうが、可能なものが複数出てくると、その中からどれを選ぶか、その選択を文法の名において規則化することは難しい。

- 7) (この人顔色が悪いなあ)
「どうかしたのですか。」
「どうしたのですか。」
「何かあったのですか。」
「何があったのですか。」

「どうもしませんでした。」 (×) 「何もありませんでした。」 (×)
「どうもしません。」 (△) 「何もありません。」 (×)
「何でもありません。」 (○)

同じ状況で発することができるこれら四つの質問形式から一つを選ばせるものは何だろうか。日常の会話で理由を尋ねるとき、文章語的で古い、固い、強いと感じられる「なぜ」より「どうして」を好んで使っている日本人が多いと思うが、その選択が、調子が穏やかだという全くの主観によっていると考えても、不都合はないだろう。「何をする」より「どうする」が出やすいことについても同じだ。質問が明確になり、必然的に語調が強いと感じられる名詞構文を避けるスタイルではないだろうか。

また、「どうしました」よりは「どうかしました」を、「何があったのですか」よりは「何かあったのですか」を選ぼうとすることについても同じように考えることができる。知りたいことを性急に尋ねることを避け、段階を踏んで穏やかに聞こうとする。つまり、婉曲語法の一つと言えなくない。

すると、四つの質問形式のうち上の三つは相手の普通ではない様子の原因を知りたい時、その原因が何であるかはっきりと聞くのを避けるために用いられる穏やかなスタイルの選択肢ということになる。これらに序列を付けることもできなくはないだろうが、ここではこれは文法の問題ではなく、文法に関わる修辭的なスタイル選択の問題と見なせることを確認しておこう。

このような質問に対する答え方で圧倒的に多いと思えるのは「何でもありません」で、これは質問の四つの形式のどれにも対応していない。質問されたことに答えるよりも、質問者がそのような疑問を抱く発端となった自分自身の様子の異常そのものを打ち消す表現として、「私の様子が普通ではないと見えたかもしれませんが、それは何でもありません」という表現が出るのだろう。このような返答の仕方はやはり文法で律するものではない。

3. 文法とスタイルの交錯

同義表現の中から一つを選ぶことについて考えたが、文法において同義的な表現、語彙はどう扱われるだろうか。例を見てみよう。

- 8) a 朝から頭痛がしました。それで、学校を休みました。
- b 朝から頭痛がしました。ですから、学校を休みました。
- c 朝から頭痛がしました。だから、学校を休みました。
- d 朝から頭痛がしましたので、学校を休みました。
- e 朝から頭痛がしましたから、学校を休みました。
- f 朝から頭痛がしたので、学校を休みました。
- g 朝から頭痛がしたから、学校を休みました。

ここで使われている「から」と「ので」はどちらも原因や理由を述べるものなのだが、二つの違いを文法の視点で記述すればたいてい次のようになる。

（「から」は）用言、及び、助動詞のうち、意志を表す「う（よう）、まい」を除いたものの終止形に付く。「もうすぐ来るだろうから、準備をしておいてくれ」「珍しい物もあるまいから、見に行くのはやめた」のように、推量の助動詞に付くことのできるところが、「ので」と異なる。結びの述語が意志や命令などを表す場合は、「ので」より「から」のほうが自然である。「熱があるので学校を休むから、伝えておいてください」のように、「から」は「ので」を含むことはできるが、その逆はできない²⁾。また、「ので」は連体節に収まるが、通常「から」は収まらない³⁾。更に、「お酒が飲めないのは、まだ未成年だからだ」のように、原因や理由を結びの節に置く用法もある。【日本語教育辞典、p. 399（仁田義雄）】

文法的記述ということで使い分けを規則として扱おうとするのだが、そうなりにくいスタイル選択の問題が垣間みられる。

「結びの述語が意志や命令などを表す場合に『ので』より『から』のほうが**自然**である」と言ったり、「『ので』は連体節に収まるが、**通常**『ので』は収まらない」と言うのだから、暗にどちらの場合も両方が使われていることを認めていることになる。しかし、一方を自然、他方を不自然と感じるのは主観の問題だ。このような場合に「ので」を使っている者が自分の用法を不自然と感じながら使うわけがない。「ので」を使わない方がいいと感じるスタイル感覚があるから、このような記述の仕方をするのだが、これでは他のスタイル感覚を排除することになってしまう。それでいいのだろうか。

「熱があるので学校を休むから、伝えておいてください」のような包み込みについても同じことが言える。この説明で不可能と判定されている逆の組み合わせ「熱があるから学校を休むので、伝えておいてください」がいけないとは思えない。「から」で「ので」を包もうが、「ので」で「から」を包もうがスタイルがほんの少し違うとしか感じない。

ここではそれよりまだ「熱があるから学校を休むから、伝えておいてください」、「熱があるので学校を休むので、伝えておいてください」のように同じものを組み合わせることではないことが指摘されてしかるべきだろうが、こちらにしても文法として扱っていいものかどうか迷うところだ。

「から」と「ので」の使い方が違う例があるとしても、非常に多くの例で原因・理由を示す同義表現となり、その場合はどちらを使おうが個々人の勝手だと見なされていることは言うまでもなく、それはここでも前提となっている。しかし、どちらを使うのも自由だと言っても、二つのうち一方しか使わない日本人がいるとは思えないし、両方を交替で、あるいは無秩序に使っているとも思えない。いくつかスタイルを使い分けることができる者も、ただ一つのスタイルしか使えない者も、そのスタイルの中では基調となるものが選ばれているのではないだろうか。

「から」を基調としている者は単調さを避けるためとか、強調するためとか、何かの理由で変調したほうがいいと思える時に「ので」を使うだろうし、「ので」を基調としてい

る者も同じように少しだけ「から」を混ぜるだろう。選択の優先順位である。ここまでの自由が認められるなら、二つの理由の組み合わせ方にもスタイルの自由があるのではないだろうか。

理由節の中に理由節が含まれる場合、内側の、先行する理由節にその人のそのスタイルの基調となるものが選ばれる可能性もあるだろうし、主節まで含めた構文全体を意識していれば、後になる外側の理由節に基調となるものを選ぶ可能性もある。ここでは変調するほうが良いという判断は共有されるが、使える組み合わせが一通りしかないとは思えない。

文法の視点に立てば同義であることは前提にしかならず、どういう場合に違うかを追求することになる。先に揚げた原因・理由を述べる例は同義表現の典型と思うが、どれでも構わないと言うだけで済ませられるものだろうか。

文法的機能が同じだとしても、日本人は文の終わり方やこのような接続の仕方にスタイルというものを強く感じる。ここにはだ・である調の例やさまざまな方言までは揚げていないが、小説などではこのような言葉遣いの違いで作中人物が描き分けられることも多いだろう。僅かな違いで出身地、男か女か、若いかどうか、遠慮深いか率直であるかなどさまざまなことが感じられる。

日本人はこのようなスタイルの選択肢から何か基準を立て、自分に最もふさわしいものを選んでいくようだ。その基準はたいてい「強い／弱い」「いい／悪い」「きれい／きたない」のように感覚的、主観的なものと思える。感覚的な基準を文法に取り込むことは難しいが、文法的記述を押し進めていけば、どうしてもこのような主観という壁にぶつかる。その領域に足を踏み入れないように努力していても踏み入れてしまうぐらいなら、積極的に踏み込み、そこから文法を見直すことを考えてもいいのではないだろうか。

条件を表すのに同義的に使える「たら／なら／ば／と」や逆接の接続詞「が／だが／ですが／でも／しかし／しかしながら／けれど／けれど／けれども／…」になると選択肢はかなり多い。しかし、これらの場合にしても、どれか一つを標準と規定することはできないし、だからと言ってすべてを取っ替え引っ替え使うものだとも言えない。「から／ので」の場合と同様、スタイルを作るためには基調となるものが一つ選ばれ、それに変化を付けたり、強調するためにもう一つか二つが普通組み合わせられる⁴⁾。つまり、それぞれの語彙がスタイルと見なせるだけでなく、その組み合わせ方もスタイルと見なせることになる。

4. 敬語とスタイル

日本語には文法の一部として敬語がある。英語などの文法にはこのような項目がないため、敬語は日本独特のものと考えられたりもするが、敬意を表す表現、言葉遣いはおそらくどこの国にもあるだろう。ただ、そのようなものは言葉の規則である文法ではなく、修辭法かエチケットに属しているのだろう。敬意を表す表現のあるなしではなく、文法の中にあるかどうかの問題ということだが、日本語が文法の一部としてこれを含んでいるのだ

から、日本語文法のスタイルが独特だと言うことはできる。

- 10) a 文法はA先生が教えた。
b 文法はA先生が教えてくれた。
c 文法はA先生が教えてくださった。

敬意を表す表現が語彙の入れ替えによるものなら、修辞法との問題とするほうがいいだろうが、このように語形の変化や付加要素によるものであれば、文法と見て当然だ⁵⁾。

留学生の書いた日本語作文に a のような文があれば普通 b か c のように書き直す。しかし、それはこの文自体が間違いだからではない。先生のしたことを述べるには敬語を使っているほうがいい、敬って当然だからというのは文法ではなくエチケットの問題であり、この先生に強く反感でも抱いていれば、a が一番ふさわしいと言える。しかし、その作文中で何か所か敬意を表す表現を使っていたり、内容自体がそれを示しているときには間違いということになる。これは文法ではなく文章作法の問題と思えるが、このようなスタイル選択については先行する文に合わせるというあまりにも単純な規則であるせいか、文章作法の項目として上がりにくく、文法が扱うべきものと考えられやすい。

文章中で同じ表現を何度も繰り返すのはエレガントではないと考える言語文化にいる者であれば、最初のほうで「～してくださった」を使えば、その後では使わない方がいいと考える可能性がある。「教えてくれた／教えてくださった」は「教えた」という動詞に敬意を表す要素が付け加わっている、つまり「動詞＋敬意」なのだから、この文以外で既に敬意を表していれば十分であると考えられるのだ。

一方、この場合日本人は b よりも a のほうに意味の量を多く感じやすい。用いられている言葉の数と表現される意味の数は比例するとは限らない。日本人がエチケットとしてであれ文章作法としてであれ、b の「教えてくれた」を標準的なスタイルと感じていると、a の「教えた」はそれに反感・敵意の表現が付け加わったと感じるのではないだろうか。これはスタイルの零度化、つまりスタイルが標準として安定すると起こりうる意味の希薄化である。動詞が敬意表現要素の付加なく使われていると、それがなく「意識的に付加しない」という行為だと考え、敬意と反対の意味を感じとるのである。

- 11) a 教えた (0) → (-1)
b 教えて／くれた (+1) → (0)
c 教えて／くださった (+2) → (+1)

言語自体一つの制度だが、その内部でも意識的、無意識的に標準の認定が不断に行われ、ミクロ的に制度化が行われる。少数の者の主観であっても、標準と認定され、そのように

扱われていけば規則となっていく。

- 12) a 1時にここに来い。
- b 1時にここに来てくれ。
- c 1時にここに来てくれないか。
- d 1時にここに来て。
- e 1時にここに来てくれる。
- f 1時にここに来てください。
- g 1時にここに来てくださいますか。
- h 1時にここに来てくれないか。
- i 1時にここにおいで。
- j 1時にここにおいでください。
- k 1時にここにおいでくださいますか。
- l 1時にここにいらっしゃって。
- m 1時にここにいらっしゃってください。
- n 1時にこちらまでご足労願います。
- o 1時にこちらまでご足労お願いいたします。
- p 1時にこちらまでご足労お願いできませんか。

上の例はどれも指定の時間に指定の場所へ来るように「命令する／頼む／願う」表現であり、同義表現の選択肢と見ることができる⁶⁾。ここには動詞の変化形という典型的な文法、動詞の付加要素、語彙の交替、否定疑問という修辞行為までさまざまな形成法が見られるが、文法とはこの形成法のことなのだろうか。そうであれば、作られる表現の数だけ異なる意味があり、使い分けがあるかのように思えるが、そうではあるまい。

ずらりと並べると敬意の強さが少しずつ違うようにも思えるが、これらすべてを使い分けている日本人がいるとは思えない。そこまでの識別は無理だ。この中からいくつかを選んで組み合わせて、せいぜい反感・敵意(-1)、中立(0)、敬意(+1)、特別な敬意(+2)の四段階を使い分けるぐらいだろう。文法はもちろん表現のさまざまな形成法も含むが、それ以上にこういう使い方の規則ではないだろうか。

組み合わせによって成立するスタイルは年をとるに従って、また時と場所、相手に応じて簡単に変わるかもしれないが、表現内容となる敬意がそれ以上細かく分節されないなら、表現のヴァリエーションのすべてではなく、それだけの段階における選択が文法と見なされるべきだろう。日本人は確かにいくつかの段階でスタイルを切り替える。

列挙されること自体まずないと思われるこのような同義表現群は動詞の変化形、付加要素、修辭的構文という文法内の項目によって作られているのだが、一つのスタイルを作る

ための選択肢の選択、組み合わせ方は個人個人の好みによるまったく主観的なものになる。日本語の敬語は文法としてあるとばかりは言えず、修辞学、表現という言語の主観領域に深く関わる事が分かる。

5. 構文とスタイル

日本語教育において目標として立てられる日本語は現代の標準的と見なされる日本語である。現代の日本でさまざまなスタイルの日本語が使われているとしても、標準的と思えないものは切り捨て、文法の記述はただ一つの標準的なスタイルのみを捉えようとする。

しかし、日本語を単一のスタイルに絞り込むのはなかなか難しいようだ。本論でも見たように、接続詞、接続構文などにヴァリエーションがたくさんあることは日本語がスタイル選択のあることを強く望んでいることを示しているようだし、文法のごく基本的な部分にも標準化しにくいスタイルの問題を残している。

初級日本語の教科書が「だ・である・する・した」のスタイルで書かれることはない。「です・します・しました」のスタイルで書かれ、これが基調となっている。

このスタイルは外言語、つまり日本人が外に対して言葉を使う発話や文章においては標準とすることができるものではあるが、内言語のスタイル、つまり日本人がものを考えるときに使うスタイルではない。二つのスタイルのどちらが選択の基準となる零度にあるかと聞かれて「です・します・しました」のスタイルだと答える日本人はいないだろう。「です・します・しました」は「だ・である・する・した」に何かが付加されるスタイルと感じる。

です・ます調／だ・である調というのは文末調子であり、対等な語りのスタイルとしてどちらかを選ぶものだ。この同じスタイルの組み合わせを丁寧体／ぞんざい体と呼んで表現価値を付加しても、話し方のスタイルとしてどちらかを選ぶものと見なすことには変わらない。

「だ・である・する・した」のスタイルは日本人が自分の内なる言葉のスタイルとして零度と感ぜられるのであれば、その意味で標準と言っておかしくない。発話行為に先立つ思考段階で対話者への配慮なく使うスタイルであるから独白体、思考体と呼ぶこともできるだろうが、そのまま発話すれば対話体としても使える以上、この名称は使いにくい。

発話のスタイルとして二つ使われるとしても、発話前の思考段階で使われるのが「だ・である・する・した」のスタイルだけなら、こちらがこの段階に固有のスタイルだと見なせる。

ところが、日本語教育では「です・します・しました」という外言語のスタイルを基調にしており、このような内と外におけるスタイルの違いに言及されることがなければ、学習者はこれが日本人の発話前の思考段階でも使われる零度のスタイルだと考えてしまい、次のような日本語を使うようになる。

- 13) 私はヨーロッパに住んでいる時、
「ヨーロッパ人の話し方はおかしいですね」と思いました。(×)
ヨーロッパ人の話し方はおかしいと思いました。(○)

「します」と「する」の違いを単に語形の違いとして使用規則の中でのみ扱っていると、このようなスタイルに関わる文法の理解がなかなか進まないのではないだろうか。

6. 助詞の用法とスタイル

次に、日本語文法の根幹とも言える助詞について考えてみよう。一般的に助詞は用例の分類によって記述され、使い方の一番多い「に」であれば、以下のようなになる。

- (1) 在り場所を表す。
- (2) 行く先を表す。
- (3) 物の授受などを行う相手を表す。
- (4) 動作や態度が向けられる先を表す。
- (5) 原因を表す。
- (6) 変化の先を表す。
- (7) 形容詞の表す状態が成り立つための基準や志向対象などを表す。
- (8) 動作の目的を表す。
- (9) 時を表す。
- (10) 動詞を受け身にしたときの、動詞の主体を表す。
- (11) 動詞を使役にしたときの、動詞の主体を表す。

言うまでもなく、これは現代の標準的な日本語の用法である。そして、外国人の日本語に次の上のような文が表れると、下のように助詞は書き直されるだろう。

- 14) 私は広島大学に日本語を学びました。(×)
私は広島大学で日本語を学びました。(○)

このような場合に用いる助詞は「で」であり、それは次の用法分類にも掲げられている。

- (1) 道具・方法等を表す。
- (2) 材料を表す。
- (3) 原因を表す。
- (4) 動作の行われる場所を表す。

- (5) 動作が行われている時間や行われることになる時を表す。
- (6) 動作の行われる状態や行われ方を表す。
- (7) 主体の量的限定を表す。
- (8) 動作の主体を表す。

中級者、上級者の日本語作文を読んでも、「に／で」の混乱は非常に多く、それは英語の前置詞と大まかに比べたとき、用法がズレてしまうことも原因のようだ。

- 15) ケイコは図書館に行きます。 Keiko goes **to** school.
- ケイコは図書館にいます。 Keiko is **in** the library.
- ケイコは図書館で勉強します。 Keiko studies **in** the library.

助詞と前置詞の対応は【に- to】／【に- in】／【で-in】となる。英語の前置詞では【in】ひとつにまとまっている用法が、日本語の助詞では「に」と「で」に別れている。「いる／ある」という基本中の基本の動詞と組み合わされる「に」のこの用法がなければ、対応はすっきりとして、日本語学習者の混乱は少なくなりそうだが、用例をこのように扱う限りどうしようもなく、繰り返し注意を促すしかない。

しかし、ここで考えてみよう。14)の例では書き直されるだろうが、日本語には動作の行われる場所を「で」ではなく、「に」で表すことがあるはずだ。

- 16) 1946年広島に死す。(1946年広島で死んだ。)
- 17) 広島大学に学び、卒業される皆さん、…(広島大学で学んで、卒業される皆さん、…)

歴史的記録や公式のスピーチで使われるこのような「に」の用法は先の標準的日本語の用法には入れられていない。これは古めかしい文語的スタイルであり、標準的なものではないということだろう、除外されている。

標準的な日本語というものを古い日本語や方言のような他のスタイルと切り放して抽象的に考えることはできる。しかし、果たして日本人が既に獲得している日本語能力が標準的な日本語のスタイル一色で形成されているだろうか。よほど特殊な人工的環境で育てられない限り、標準的な日本語のスタイルだけの日本語が習得されることはないだろう。現実には標準的スタイルというものはさまざまな日本語経験を通して習得される数多くのスタイルの一つに過ぎない。すると、日本人の助詞の選択にもこのようなスタイルの選び方が大きく関わっているのではないだろうか。

「で」が出現する以前、現代の「に」の用法と「で」の用法を未分化なままに合わせ持っていた古いスタイルの「に」を加え、「に」と「で」の用法と英語の前置詞との対応を見

直してみると、次のようになる。

古いスタイル			現在のスタイル
に	→	に	に (to)
(to/in)			
	→	にて／において	で (in)

現代の標準的なスタイルだけを考えると、「に (to/in) /で (in)」と英語前置詞との対応が乱れるが、古いスタイルと合わせて考えると、この段の冒頭で見た「に」の用法の(1) 在り場所を示すは古いスタイルのに含めることができ、前置詞との不調和要素がなくなり、用法の分類が非常にスッキリする⁷⁾。

16)、17)のような例では現代の日本人がスタイルの選択肢としているため「で」が新しいスタイルで「に」は古いスタイルだと意識できる。一方、「ある／いる」と組合わさる「に」を古いスタイルと感じる日本人はいない。しかし、それは古くからずっと同じものが使い続けられ、対比される新しいスタイルがないためではないだろうか。基本中の基本と言える動詞がただ一つの助詞を使い続けていれば、それを現代の日本人が古いと感じるはずがない。

他の助詞についても用例分類はスタイルという視点を採ることで簡略化できるように思える。

7. おわりに

自国で日本語をかなり勉強してから日本に来た留学生の中にも、日本語について作文を書いてもらうと、日本で日本人が使っている日本語が国で勉強した日本語とぜんぜん違い、会話を聞いてさっぱり分からないので驚いたと書く者が非常に多い。それは日本人が英語をだいぶ勉強し、かなり読み書きができるようになって聞き取りや発話がうまくできないと言うのに似て、外国語の勉強は難しいものだという意味にも、またよく言われるように日本語の文法が並外れて難しいという意味にもとれるのだが、実際にはどうなのだろうか。

海外で教えられている日本語の文法が現在日本人の使っている日本語と別段違うわけでも、文法として教えられることがそれほど理解しにくいわけでもないようなのに、こういう感想が出るのだ。

文法もしっかり勉強し、本もかなり読み、聞き取りや発話の練習もだいぶ積んだ外国人でもそうだとすれば、具体的には何が原因だろうか考えてきたが、本稿で論じたように日本語にさまざまなスタイルのあることが大きく関わっているからではないだろうか。

外国語に翻訳可能な文法的意味や思考内容が一つしかなくてもそれを表すために使われ

る表現のヴァリエーションが日本語には極めて多い。同じことを意味する手段にさまざまなスタイルがあるのである。表現手段としての言葉の数だけ意味やニュアンスの差があり、理解されているとすれば、日本人は異常に細やかな言語を使っていることになるのだが、そのようにも思えない。それは考え方の問題だ。

表現の形成法、そのヴァリエーションの形成法を即文法、即意味と見れば、日本語は多種多様で複雑極まりないものということになる。教科書で示される標準的なスタイル以外に、地域によってある方言語彙、お国訛り、性別、世代、職業などによるスタイルが、またそれぞれのスタイルの中にも何通りもの省略法、助詞による色づけによるヴァリエーションがあるからだ。

しかし、日本人はその微少な差異をすべて理解しコミュニケーションしているわけではない。自分が認識できる幾つかの差異に応じたスタイルしか厳密な意味では使い分けができないのではないだろうか。つまり、自分の使わないスタイルの表現はただ自分の尺度に合わせて解釈するだけで、それを使った者の意識にあったものを完全に理解しているわけではないのである。ヴァリエーションとは一つの同じ内容を共有する入れ物ではなからうか。言語には新しい入れ物が新しい内容を作り出すという側面があることは否定できないが、交換され、共有される意味とそれを可能にするシステム、それを文法と考えたい。(了)

注

- 1) 「～するつもりがありますか」はこの堅いスタイルそのままでは使われないと感じるかもしれないが、「～するつもりある(の)」のように砕けたスタイルでは使われていると感じるだろう。「つもり」と「ある」の組み合わせと理解されたい。このように不一致、非対応の文法はスタイルの感覚と深く関わっている。
- 2) 理由節が理由節を内包する構文での「から」と「ので」の組み合わせを規則ととらえること自体に抵抗を感じる者もいるだろうし、そもそもこのような構文を使うべきではないと考える者もいるだろう。規則と見るか見ないかが主観によることは多く、その見方自体スタイルとなっている。
- 3) 例文が付けられていないので判然としないが、この規則も訝しい。連体節で主語にあたるものに「は」が使われず「が」が出ること、また「します／しました」は使いにくく、「する／した」が出やすいことと連動する言葉選びかもしれないが、それならこの「から」と「ので」は逆ではないかと思える。
参照) 中川正弘、「は／が」と助詞選択の零度、広島大学留学生日本語教育、第8号、1996年、p. 19
- 4) 本稿で用いた「原因・理由」「逆接」「条件」のスタイルは次のような数値が示すだろう。
から(23)／ので(1)、しかし(14)／・・・だが(9)／・・・。だが(1)。けれども(0)／でも(0)、たら(0)／なら(7)／ば(18)／と(17)
- 5) 英語やフランス語など、西洋言語で文法の枠内で敬意の表現と扱われるのは助動詞、動詞の假定法(条件法)の使用である。これは「時制」という文法における基本事項の問題であるため文法内で扱われるが、語彙の交替による敬意表現はあるだろう。

- 6) ここに揚げたものがすべてではない。終助詞によって作られるヴァリエーション、方言、またテレビや映画の時代劇で使われる古い時代のスタイル（実際その時代に使われていたものと違っていてもスタイルとして成立しえる）も考えれば数え切れないほどある。
- 7) ここでは分岐図を簡略に表すため英語の前置詞に on/at は加えなかった。

参考

- 中川正弘、**文法におけるパラダイグムの諸相**、広島大学留学生センター紀要、第1号、1991年
- 中川正弘、**「作文」を「読む」／「書く」技能の位置づけと展開**、広島大学留学生日本語教育、第4号、1992年
- 中川正弘、**作文の誤りと文体**、広島大学留学生センター紀要、第3号、1993年
- 中川正弘、**作文と解釈行為**、広島大学留学生センター紀要、第4号、1994年
- 中川正弘、**外国人の日本語、日本人の日本語 - 言葉の問題から教授法の問題へ -**、広島大学留学生日本語教育、第6号、1994年
- 中川正弘、**作文の添削と文体差**、広島大学留学生日本語教育、第7号、1995年
- 中川正弘、**「は／が」と助詞選択の零度**、広島大学留学生日本語教育、第8号、1996年
- 中川正弘、**添削文が語る日本語のスタイル(1)完了表現と時制**、広島大学留学生教育、第1号、1997年
- 中川正弘、**添削文が語る日本語のスタイル(2)言葉の選択と序列**、広島大学留学生教育、第2号、1998年